

# 怖いもの見たさと個人特性の関連性

○小林美結菜・向居暁  
(県立広島大学地域創生学部)

## 問題と目的

私たちは日常生活において様々な対象に恐怖を感じ、通常はそれらを回避する。しかし、ホラー映画やお化け屋敷など、恐怖をテーマにした娯楽が数多く存在し、人々が意図的に恐怖に接近し、それを楽しむ現象が見られる。なぜ人々は「怖いもの」を見たがるのだろうか。怖いもの見たさについて、繁柘他 (2019) は、刺激希求傾向が関与するという生理的喚起仮説 (Zuckerman, 1996) について検証したが、この仮説は支持されなかった。一方、玉井他 (2019) は、怖いもの見たさは未知への好奇心が影響するという好奇心仮説を提唱し、新規性が不快な刺激に対する選好を促進する要因の一つであることを実証した。

しかし、繁柘他 (2019) では、快・不快感情は一次元上の両端に配置され、同時には測定されておらず (e.g., Andrade & Cohen, 2007), 生理的喚起仮説を棄却するには不十分である。また、玉井他 (2019) は、新規性が低い不快刺激にも一定の割合で選好がみられたことから、新規性以外にも怖いもの見たさの規定因があると主張している。

そこで、本研究は、怖いもの見たさと関連する個人特性を検討することを目的とした。本研究では、主として、生理的喚起仮説に基づいて刺激希求を、好奇心仮説に基づいて知的好奇心 (特に拡散的好奇心) を検討した。加えて、怖いもの見たさと関連があると考えられるその他の性格特性を探索的に検討した。

## 方法

**調査対象者** 大学生・専門学生 199 名 (男性 55 名, 女性 142 名, 不明 2 名) を分析対象者とした。平均年齢は 19.39 歳 ( $SD=1.63$ ) であった。

**手続き** まず、本研究において、恐怖を感じる対象に接近し、楽しもうとする行動を「恐怖追及行動」とし、「絶叫系の乗り物に乗る」「お化け屋敷へ行く」「バンジージャンプをする」「心霊スポットへ行く」「日本のホラー映画を見る」「海外のホラー映画を見る」の 6 項目を提示した。また、比較のために、「国内旅行へ行く」「海外旅行へ行く」「絶叫系以外の乗り物に乗る」「パワースポッ

トへ行く」「ホラー以外の映画を見る」の 5 項目もあわせて提示した。そして、これらの項目に対する態度 (「行きたい」「怖い (逆転項目)」「楽しい」「危険 (逆転項目)」「好き」の平均)、および、これまでの実施頻度について解答を求めた。

怖いもの見たさとの関連性の検討には、刺激希求尺度 (柴田, 2008), 知的好奇心尺度 (西川・雨宮 2015), 制御焦点尺度 (尾崎・唐沢, 2011), 多次元共感性尺度 (鈴木・木野, 2008), 情動コンピテンシー尺度 (野崎・子安, 2015) を使用した。

## 結果と考察

各恐怖追及行動への態度と頻度を目的変数、性格特性の尺度を説明変数とした重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った。その結果、恐怖追及行動によって関連する個人特性が異なった。全体的には、刺激希求尺度の下位尺度で、スリルを求める傾向である TAS が最も多くの恐怖追及行動への態度や実施頻度 (海外ホラー態度・頻度, 日本ホラー態度, バンジージャンプ態度・頻度, お化け屋敷態度・頻度, 絶叫系態度・頻度) に関与することがわかった。この結果は、繁柘他 (2019) とは異なり、生理的喚起仮説と整合性が高く、怖いもの見たさと刺激希求傾向との関連性が示された。また、知的好奇心尺度の「拡散的好奇心」は一部の恐怖追及行動 (日本ホラー頻度, 心霊スポット態度) としか関連せず、好奇心仮説 (玉井他, 2019) を積極的に支持する結果は得られなかった。しかし、興味深いことに、TAS は、恐怖追及行動以外の項目、例えば、絶叫系以外の乗り物、国内・海外旅行に対する態度においても関連性が認められた。Kashdan et al. (2018) は、刺激希求も好奇心の一次元として分類しており、怖いもの見たさを説明する要因の理論的再考が求められる。

## 主要引用文献

繁柘博昭・玉井颯一・村山航 (2019). バーチャルリアリティ環境を用いた怖いもの見たさの心理の検討 日心第 83 回大会  
玉井颯一・繁柘博昭・村山航 (2019). なぜ見たくないものを見てしまうのか—刺激の新規性が個人の選好に及ぼす影響— 基礎心第 38 回大会